

## &lt;原 著&gt;

## 韓国における障害学生への教育支援の実態及びニーズに関する調査研究

朴 在國\*・落合俊郎\*\*・金 美点\*\*\*・金 英美\*\*\*\*・金 恵理\*\*\*\*\*・林 恵卿\*\*\*\*

本研究は、韓国における障害学生のための教育支援実態及びそのニーズを調査することによって、障害学生の大学生生活の問題点を分析し、大学支援サービスの望ましい方向を示すことを目的とする。1995年以後に特殊教育対象者障害者特例入学制度を通じて入学した9大学に在学中の障害学生（ $n=63$ ）を対象とし、質問紙法によって彼らの大学生生活適応のための支援の実態、意識、ニーズ及び改善事項に関して調査し、分析した結果、次のような結論を得た。

第1に、障害の程度等にかかわらず、学習活動においてはノートテイク支援、大学生生活においては受講申請の事前配慮に対する支援が最も多く行われていることが明らかになった。便宜供与された試験方法、手話通訳、補装具の貸し出しなどの領域では、重度障害（1-3等級）学生が軽度障害（4-6等級）学生より多くの支援が供給されていた。しかし、受講申請など、学生生活全般に渡る支援対策の準備及び優先的受講申請制度導入の必要性を示唆する結果が明らかになった。

第2に、学習及び生活に関する障害学生の意識調査では、障害カテゴリーの中では聴覚障害学生が最も困難を感じていた。また、次に視覚障害学生と脳性まひ・肢体不自由学生の順であり、障害の程度別にみると、重度障害学生は軽度障害学生より講義内容、図書館、補償機器など、全般的な領域でより強い困難を感じていた。このような結果は、障害学生の学習及び生活を支援するための積極的なサポート制度の整備、特に聴覚障害学生と重度障害学生のための支援の緊急性を示唆するものである。

第3として、障害学生の支援ニーズ及び改善事項では、奨学金支援に対する要求が最も高く、学業に必要な情報交換及び授業上の困難さに対する要求が多く見受けられた。この他にも、聴覚障害学生と視覚障害学生は案内電光板の設置、点字案内標識などの要求が高かった。このような結果は脳性まひ・肢体不自由より聴覚障害学生と視覚障害学生のための施設・設備が相対的に不足していることを示唆する。大学内での聴覚障害学生と視覚障害学生のための施設・設備などの設置が優先的に必要とされていることが明らかになった。

キーワード：障害学生の支援体制、教育支援の実態、教育支援のニーズ

## I. はじめに

社会は知識社会の到来によって生涯学習の重要性が強調されるようになった。特に情報技術の発展、産業構造の変化、職業の盛衰サイクルの激化などは、継続的な学習を必要としている（チョンドンヨン・パクソンファ・ウォンソンオク・リュウスクリョル, 2005）。人間において教育が持つ意味は、社会市民として自立的で創造的な生活を営む基盤であり、非常に

重要である。特に、今日のように過度の競争社会の中で、「社会的弱者」になる可能性が高い障害者にとって、教育は彼らが社会市民として活躍するための根幹になるだけでなく、画一的な平等から脱して、個人間、階層間の格差を減らすことができる手段と考えられる。彼らに適切な教育サービスを提供することは、大変意味があることである（キムヘレナ, 2000）。

したがって、高等教育の中心である大学教育では、障害学生の支援施設の拡充はもちろん、多様な教育プログラムと支援方法の開発、支援業務担当を行う部署の設置と支援業務担当職員の配属、進路開拓支援など、多様な障害学生支援対策を準備し、知識の専門化や深化及びこれらの社会参加を保障することによって、その本質的な役割を果たすことができる（O'Hara, 1993）。しかしながら、大学が障害学生のみを対象と

\* 釜山大学校師範大学

\*\* 広島大学大学院教育学研究科障害児教育学講座

\*\*\* 東主大学校

\*\*\*\* 釜山大学校大学院博士課程

\*\*\*\*\* 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期学習開発専攻

してその機能を遂行すると、障害学生に対して差別を誘発するという批判を受ける危険性もある。しかし、心身の困難以外に活動制限、参加制約、脈絡要因(contextual factor)に規定される障害状態にある学生は、その制限と制約によって、一般学生たちに与えられる支援より一層多い支援が必要である(キムドンヨン・キムヨンファン, 1998)。

韓国では、教育支援体制の不備は、深刻な問題として頭をもたげている。適切な教育とは、障害学生が授業を受講し、様々なプログラムに参加するためのサービスを提供され、学内活動を行ったり施設などを利用する時に、一般学生と同等な機会を受けられることを意味する。機会均等という意味も、一般学生たちと同じ水準の様々な活動の遂行を可能とし、一般学生が享受する恩恵と権利などを障害学生も同等に受けるようにすることを意味する。したがって、障害学生たちが他のすべての大学生たちと同じく質の高い教育を受けることができるような環境を提供することが、大学の義務である(ウォンジョンレ, 2001)。

以上の理由から、教育部(日本の文部科学省にあたる)では、障害者教育権保障のために、1995年度から障害者特例入学制度を開始した。この制度を通じて入学した障害学生は、1995年度の6大学107人から10年経過した2006年度現在、72大学424人に増えており、一般入試で入学した障害学生もかなり多いと推定されている。しかし、障害学生と彼らの保護者または後見人たちは、大学内に障害学生の学習権保障のための体系的な支援制度がないことに難しさを訴えて懸念を抱いている。すなわち、大学には障害者用施設も十分に拡充されておらず、学習のための支援装備や補助員も十分に整備されていないにもかかわらず、障害学生の高等教育は単純に機会を提供するだけで、学習の適合性を保障することができていないと批判されている。したがって、障害者特例入学制度は、障害者の教育機会を拡大させたという肯定的な評価を受けているが、教育環境改善が実施されなまま法が施行されたことで、障害学生が大学で自由に生活することに多くの困難と不便があることが、現実である(チョンドンヨン・キムジュヨン, 1999)。

一方、外国の場合、大学ごとに障害学生のための多様なサービスを実施しており、これに対する学問的研究も活発に進行されている。例えば、1993年には早稲田大学で国際障害学生高等教育国際会議(International Conference on Higher Education for Students with Disabilities HEDD, 93)が開催され、世界各国の研究

者や障害学生、保護者などが参加して研究発表及び大学生生活の手記を発表した。また、アメリカに拠点を置いた国際障害学生高等教育学会(Association on Higher Education and Disability: AHEAD)では、毎年学会を開催しており、アメリカ教育学会(ACE)と共に多くの活動を行っている。オーストラリアの特殊教育学会においても、Pathway I (1994), II (1995), III (1996)という主題で学会を開催するなど、高等教育分野の研究が活発に進行されている(キムドンヨン・キムヨンファン, 1998)。しかし、韓国の大学が提供している教育環境や障害学生の高等教育支援制度にはまだ不備があり、大部分の大学では、既存の施設・設備を若干改造することで便宜を提供しているのみであり、全体的な大学運営の枠組みとしての障害学生のための高等教育支援制度は非常に不足している(キムヘレナ, 2000)。このような高等教育支援制度不足は、障害学生たちの学歴低下及びそれによる不適応にまでつながる恐れさえある(バックチャンウング・キムソンエ, 2002; キムジュヨン, 2005)。

障害学生が大学生生活に適応することができない根本的な理由は、多くの大学が入学を許可しても、大学生生活においては一般学生と同等な水準の学習権を保障することができないことにあると考えられる。また、このような障害学生に対する高等教育支援の問題点を解決するために、多くの研究が行われたが(ゾハンジン, 1997; キムジョン, 2000; キムヘレナ, 2000; 金兄嫁, 2001; バックチャンウング・金聖愛, 2002; ユンゾムリョング・金駐英, 2002)、韓国における障害学生のための高等教育支援制度は十分ではない。

そこで、本研究の目的は、障害学生の大学生生活適応実態を調査してその問題点を分析し、今後の望ましい大学支援サービスの方向を提示することである。本研究の目的に関する研究課題は以下の通りである。

- 1) 障害学生の大学生生活への適応のための支援実態を分析する。
- 2) 障害学生の大学及び生活に関する意識を把握する。
- 3) 障害学生の支援ニーズ及び改善内容を把握する。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

本研究の対象者は、1995年以後における特殊教育対象者のうち特例入学制度を通じて入学した9大学に在学中で、本研究に参加意思がある学生を対象とした。

Table 1 調査対象者のプロフィール

区分	人数(%)	
性別	男	28 (44.4%)
	女	35 (55.6%)
年齢	19歳-25歳	39 (61.9%)
	26歳-30歳	15 (23.8%)
	30歳以上	9 (14.3%)
合計	63	

Table 2 調査対象者の障害について

区分	人数(%)	
障害カテゴリー	脳性まひ・肢体不自由	27 (42.9%)
	視覚障害	12 (19.0%)
	聴覚障害	24 (38.1%)
障害等級	一級	24 (38.1%)
	二級	24 (38.1%)
	三級以下	15 (23.8%)
合計	63 (100.0%)	

Table 1, 2は、調査対象とした学生たちのプロフィールである。

## 2. 調査方法

本研究で使われたアンケート項目は、本研究者が研究目的に合わせて作成した。アンケートは大きく4領域、すなわち、一般的な事項、大学生生活適応のための支援項目、大学学習及び生活に関する項目、支援ニーズ及び改善に関する項目で構成されている。支援ニーズ及び改善に関する項目は、施設・設備関連項目、財政支援、授業・学習支援、大学内外での生活支援に対して自由記述項目で構成された。

## 3. 調査の手続き及び資料の分析方法について

本研究では、研究対象とした9大学の障害学生へアンケート紙による直接設問紙法を使った。9大学に配付された100部のアンケート紙の中で、回収された設問紙は65部(65%)であり、不完全あるいは曖昧に作成された2部のアンケート紙を除いた63部(63%)のみ分析に使われた。調査研究によって収集された量的資料はSPSS(ver. 10.0, 2001)を使って統計処理し、自由記述による質的資料も範疇化してSPSSで統計的分析を行った。

## Ⅲ. 結果

### 1. 障害学生の大学生生活への適応のための支援内容について

障害学生の大学生生活への適応のための支援内容を調べるために、学習活動、大学生生活への適応の領域で分けて調査を実施した。

#### 1) 学習活動に関する支援内容

Table 4, 5, 6は、学習活動サポート内容に対するアンケート結果である。Table 4に示すように、学習活動のために支援された内容を順位別でみると、ノートテイク(38.1%)が最も多かった。次に授業資料を前もってファイルとして提供、試験時間の延長、講義室の環境整備がそれぞれ23.8%であった。

一方、障害等級による学習活動支援状況を分析した結果はTable 5の通りである。領域別に見ると、学習活動においては、その他を除いて全般的に重度障害(1-3等級)学生が軽度障害(4-6等級)学生より、多くの支援を受けていた。その中でも特に試験方法の修

Table 3 調査用紙の構成

領域	設問内容	質問数	
一般的な事項	アンケート調査の回答者の年齢、性別、所属大学及び専攻、障害名や等級に関する事項	4	
大学生生活適応のための支援事項	学習活動、大学生生活適応、支援者に関する事項	23	
大学学習及び生活に関する事項	講義内容、授業適応、図書館利用、トイレ利用、学内移動、受講申請などに関する事項	20	
支援ニーズ及び改善事項 (自由記述)	施設・設備関連事項	図書館、講義施設及び特設施設などに関する事項	1
	財政支援	奨学金など財政支援に関する事項	1
	授業・学習支援	学習補償機器、試験や成績管理、書類申し込み及び書類発給などの事務サービス、学業に必要な情報交換及び授業上の難しさ、教員との交流、サークル活動に関する事項	1
	学校内外生活支援	対人関係、障害の理解・啓発、相談及び教育などに関する事項	1
	その他	問題点及び要求事項	1
計		52	

Table 4 学習活動支援に対する回答  
(多重回答)

支援内容	頻度( <i>n</i> =63)	順位
ノートテイク	24 (38.1%)	1
課題遂行のための準備 (提出期間の延長等)	6 ( 9.5%)	10
講義の録音に対する配慮	9 (14.3%)	7
試験方法の修正(点字, コンピューター使用)	12 (19.0%)	5
手話通訳	12 (19.0%)	5
授業資料を前もってファイルで提供	15 (23.8%)	2
学習補助機器の貸出	6 ( 9.5%)	10
点字や大きい活字による資料提供	6 ( 9.5%)	10
試験時間の延長	15 (23.8%)	2
講義室の環境整備(講義室や机の構造など)	15 (23.8%)	2
録音教材の提供	6 ( 9.5%)	10
図書館情報の提供	9 (14.3%)	7
その他(文字通訳, ノートパソコン支援)	9 (14.3%)	7

Table 5 障害等級別学習活動の支援

質問内容	障害等級		全体 ( <i>n</i> =63)
	1-3 等級( <i>n</i> =41)	4-6 等級( <i>n</i> =22)	
ノートテイク	22 (53.7%)	2 ( 9.1%)	24 (38.1%)
課題遂行のための準備 (提出期間の延長等)	5 (12.2%)	1 ( 4.5%)	6 ( 9.5%)
講義の録音に対する配慮	8 (19.5%)	1 ( 4.5%)	9(14.3%)
試験方法の修正(点字, コンピューター使用)	12 (29.3%)	0 ( 0.0%)	12 (19.0%)
手話通訳	12 (29.3%)	0 ( 0.0%)	12 (19.0%)
授業資料を前もってファイルで提供	14 (34.1%)	1 ( 4.5%)	15 (23.8%)
学習補助機器の貸出	6 (14.6%)	0 ( 0.0%)	6 ( 9.5%)
点字や大きい活字による資料提供	5 (12.2%)	1 ( 4.5%)	6 ( 9.5%)
試験時間の延長	14 (34.1%)	1 ( 4.5%)	15 (23.8%)
講義室の環境整備(講義室や机の構造など)	14 (34.1%)	1 ( 4.5%)	15 (23.8%)
録音教材の提供	6 (14.6%)	0 ( 0.0%)	6 ( 9.5%)
図書館情報の提供	9 (22.0%)	0 ( 0.0%)	9 (14.3%)
その他(文字通訳, ノートパソコン支援)	0 ( 0.0%)	9 (40.9%)	9 (14.3%)

正 (29.3%), 手話通訳 (29.3%), 学習補助機器の貸出 (14.6%), 録音教材の提供 (14.6%), 図書館情報の提供 (22.0%) の項目にあって, 重度障害が軽度障害のある学生より学習活動の支援をよく受けていることが現われた。

また, 障害カテゴリーと学習活動支援状況を分析した結果を Table 6 に示した。領域別に見れば, 学習活動サポート領域の中でノートテイク支援 (66.7%) と試験時間の延長 (41.7%) は, 視覚障害学生が他の障害カテゴリーの学生たちより多い支援を受けており, 授業資料を前もってファイルで提供 (40.7%) 及び講義室の環境整備 (40.7%) は, 脳性まひ・肢体不自由学生たちに対する支援が他の障害領域より多少高かった。

## 2) 大学生生活適応に対する支援内容

大学生生活への適応に関する支援内容を分析した結果は, 下の Table 7, 8 に示した。Table 7 から見られるように, 大学生への生活適応のために支援された内容を順位別で見れば, 受講申請に対する事前配慮 (57.1%) が最も高く, 次に寮の優先入居 (42.9%), 補装具の貸出 (23.8%), 学習及び心理相談サービス (23.8%) の順であった。

一方, Table 8 にみられるように, 障害等級による大学生生活への適応支援の現況を分析した結果, 補装具の貸出 (36.6%), 校内外の障害者用車両の運行 (29.3%) は重度障害学生が軽度障害学生より多くの支援を受けていた。しかし, 受講申請に対する事前配慮は, 重度障害78.0%, 軽度障害18.2%で, 全般的にすべての障

Table 6 障害カテゴリー別学習活動の支援

学習活動支援の領域	障害カテゴリー			合計 (n=63)
	脳性まひ・肢体不自由 (n=27)	視覚障害 (n=12)	聴覚障害 (n=24)	
ノートテイク	8 (29.6%)	8 (66.7%)	8 (33.3%)	24 (38.1%)
課題遂行のための準備(提出期間の延長等)	2 ( 7.4%)	2 (16.7%)	2 ( 8.3%)	6 ( 9.5%)
講義の録音に対する配慮	5 (18.5%)	2 (16.7%)	2 ( 8.3%)	9 (14.3%)
試験方法の修正(点字, コンピューター使用)	10 (37.0%)	2 (16.7%)	0 ( 0.0%)	12 (19.0%)
手話通訳	2 ( 7.4%)	0 ( 0.0%)	10 (41.7%)	12 (19.0%)
授業資料を前もってファイルで提供	11 (40.7%)	2 (16.7%)	2 ( 8.3%)	15 (23.8%)
学習補助機器の貸出	4 (14.8%)	2 (16.7%)	0 ( 0.0%)	6 ( 9.5%)
点字授業資料(大きい活字)提供	2 ( 7.4%)	4 (33.3%)	0 ( 0.0%)	6 ( 9.5%)
試験時間の延長	10 (37.0%)	5 (41.7%)	0 ( 0.0%)	15 (23.8%)
講義室の環境整備(講義室変更, 机など)	11 (40.7%)	2 (16.7%)	2 ( 8.3%)	15 (23.8%)
録音教材の提供	2 ( 7.4%)	4 (33.3%)	0 ( 0.0%)	6 ( 9.5%)
図書館情報の提供	7 (25.9%)	2 (16.7%)	0 ( 0.0%)	9 (14.3%)
その他	2 ( 7.4%)	0 ( 0.0%)	7 (29.2%)	9 (14.3%)

Table 7 大学生生活適応支援に対する多重回答

支援内容	頻度(n=63)	順位
寮の優先入居	27 (42.9%)	2
補装具(車椅子, クラッチなど)の貸出	15 (23.8%)	3
受講申請に対する事前配慮	36 (57.1%)	1
校内外の障害者用車両(バスなど)の運行	12 (19.0%)	5
障害学生サークル活動の支援	12 (19.0%)	5
学習及び心理相談サービス(相談室など)	15 (23.8%)	3
アルバイトの提供	9 (14.3%)	7
健康サービス(保健室, 休憩室など)	6 ( 9.5%)	8
キャンパス案内及び施設利用地図の製作・配付	3 ( 4.8%)	10
その他(サポーター, 受講/休講/再受講者に対する文字サービスの提供)	6 ( 9.5%)	8

Table 8 障害等級別に比較した大学生生活への適応のための支援について

質問内容	障害等級		全体 (n=63)
	1-3 等級 (n=41)	4-6 等級 (n=22)	
寮の優先入居	24 (58.5%)	3 (13.6%)	27 (42.9%)
補装具(車椅子, クラッチなど)の貸出	15 (36.6%)	0 ( 0.0%)	15 (23.8%)
受講申請に対する事前配慮	32 (78.0%)	4 (18.2%)	36 (57.1%)
校内外の障害者用車両(バスなど)の運行	12 (29.3%)	0 ( 0.0%)	12 (19.0%)
障害学生サークル活動の支援	9 (22.0%)	3 (13.6%)	12 (19.0%)
学習及び心理相談サービス(相談室など)	13 (31.7%)	2 ( 9.1%)	15 (23.8%)
アルバイトの提供	7 (17.1%)	2 ( 9.1%)	9 (14.3%)
健康サービス(保健室, 休憩室など)	5 (12.2%)	1 ( 4.5%)	6 ( 9.5%)
キャンパス案内及び施設利用地図の製作と配付	0 ( 0.0%)	3 (13.6%)	3 ( 4.8%)
その他	0 ( 0.0%)	6 (27.3%)	6 ( 9.5%)

害等級の学生たちが多くの支援を受けていることが明らかになった。

障害カテゴリーによる大学生生活適応支援の現況を分析した結果を Table 9 に示した。領域別に見ると、受講申請に対する事前配慮は、聴覚障害学生に対する

支援 (62.5%) が他の障害領域より多少高く、寮の優先入居項目は、脳性まひ・肢体不自由学生に対する支援(55.6%)が他の障害領域より比較的高かった。一方、補装具の貸出及び校内外の障害者用車両の運行は、聴覚障害学生たちは利用しないのに比べて、脳性まひ・

Table 9 障害カテゴリー別に比較した大学生生活への適応のための支援

学習活動支援領域	障害カテゴリー			合計 ( <i>n</i> =63)
	脳性まひ・肢体 障害( <i>n</i> =27)	視覚障害 ( <i>n</i> =12)	聴覚障害 ( <i>n</i> =24)	
寮の優先入居	15 (55.6%)	3 (25.0%)	9 (37.5%)	27 (42.9%)
補装具(車椅子, クラッチなど)の貸出	11 (40.7%)	4 (33.3%)	0 ( 0.0%)	15 (23.8%)
受講申請に対する事前配慮	15 (55.6%)	6 (50.0%)	15 (62.5%)	36 (57.1%)
校内外の障害者用車両(バスなど)の運行	9 (33.3%)	3 (25.0%)	0 ( 0.0%)	12 (19.0%)
障害学生サークル活動の支援	4 (14.8%)	4 (33.3%)	4 (16.7%)	12 (19.0%)
学習及び心理相談サービス(相談室など)	6 (22.2%)	3 (25.0%)	6 (25.0%)	15 (23.8%)
アルバイトの提供	6 (22.2%)	0 ( 0.0%)	3 (12.5%)	9 (14.3%)
健康サービス(保健室, 休憩室など)	6 (22.2%)	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)	6 ( 9.5%)
キャンパス案内及び施設利用地図の製作・配付	1 ( 3.7%)	1 ( 8.3%)	1 ( 4.2%)	3 ( 4.8%)
その他	6 (22.2%)	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)	6 ( 9.5%)

肢体不自由学生は2つの領域ともそれぞれ40.7%, 33.3%で障害学生の中で最も高い支援を受けており, 視覚障害学生たちも2つの領域ともそれぞれ33.3%, 25.0%で比較的支援が高い領域だった。そして, アルバイトの提供は, 脳性まひ・肢体不自由学生に対するサポートが22.2%で最も高く, 視覚障害学生は全く支援を受けていないのに対して, 聴覚障害学生は12.5%で支援を受けていることが明らかになった。

## 2. 障害学生の学習及び生活に関する意識

Table 10, 11は, 障害学生の学習及び生活に関する意識を分析した結果である。Table 10で見られるように, 障害カテゴリー間で有意差があった。すなわち, 障害カテゴリーの中では, 聴覚障害学生が学習及び生活で最も困難を意識しており, 次に視覚障害と脳性まひ・肢体不自由学生の順であった。授業適応, 事務手続, 情報交換, 大学生生活, 施設・設備, 成績管理, 学内移動及び授業に対する配慮では障害カテゴリー別に

Table 10 障害カテゴリー別に比較した学習及び生活における困難さ

学習及び生活領域	障害カテゴリー	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>	scheffe
講義内容	脳性まひ・肢体不自由	27	2.33	1.36	2.150	
	視覚障害	12	2.75	.45		
	聴覚障害	24	3.00	1.14		
	合計	63	2.67	1.18		
授業適応	脳性まひ・肢体不自由	27	1.89	.89	46.715***	b,c>a
	視覚障害	12	3.75	.45		
	聴覚障害	24	3.88	.80		
	合計	63	3.00	1.24		
図書館	脳性まひ・肢体不自由	27	2.33	1.52	6.844**	b>a,c
	視覚障害	9	4.00	.87		
	聴覚障害	21	2.86	.65		
	合計	57	2.79	1.29		
トイレ	脳性まひ・肢体不自由	27	1.89	1.31	2.832*	b,c>a
	視覚障害	12	2.50	.52		
	聴覚障害	21	2.57	.93		
	合計	60	2.25	1.10		
学内移動	脳性まひ・肢体不自由	27	1.67	.96	16.171***	b>a,c
	視覚障害	12	3.50	.90		
	聴覚障害	21	2.29	.90		
	合計	60	2.25	1.14		
事務手続	脳性まひ・肢体不自由	27	1.33	.48	64.890***	b,c>a
	視覚障害	12	3.25	.45		
	聴覚障害	21	3.29	.90		
	合計	60	2.40	1.17		

韓国における障害学生への教育支援の実態及びニーズに関する調査研究

補償機器	脳性まひ・肢体不自由	27	2.33	1.36	3.155	
	視覚障害	12	2.75	.45		
	聴覚障害	18	3.17	.92		
	合計	57	2.68	1.14		
情報交換	脳性まひ・肢体不自由	27	1.67	.68	25.667***	b,c>a
	視覚障害	12	3.75	.87		
	聴覚障害	21	3.29	1.31		
	合計	60	2.65	1.33		
大学生活全般	脳性まひ・肢体不自由	27	2.00	.83	33.207***	b,c>a
	視覚障害	12	3.25	.87		
	聴覚障害	24	3.75	.68		
	合計	63	2.90	1.12		
対人関係	脳性まひ・肢体不自由	27	2.22	1.42	8.236**	c>a
	視覚障害	12	3.00	.74		
	聴覚障害	24	3.50	.88		
	合計	63	2.86	1.26		
施設・設備	脳性まひ・肢体不自由	27	2.33	1.18	13.917***	b,c>a
	視覚障害	12	3.75	.87		
	聴覚障害	24	3.75	.99		
	合計	63	3.14	1.26		
サポーター支援	脳性まひ・肢体不自由	18	2.50	1.65	7.912**	b,c>a
	視覚障害	6	4.00	1.10		
	聴覚障害	21	4.00	.77		
	合計	45	3.40	1.42		
授業活動への参加	脳性まひ・肢体不自由	27	2.22	1.25	6.846**	b,c>a
	視覚障害	12	3.25	.87		
	聴覚障害	24	3.25	.99		
	合計	63	2.81	1.19		
情報提供	脳性まひ・肢体不自由	24	3.00	1.02	4.735*	b,c>a
	視覚障害	12	3.75	.87		
	聴覚障害	24	3.75	.85		
	合計	60	3.45	.98		
年限内卒業	脳性まひ・肢体不自由	24	1.75	.85	2.242	
	視覚障害	12	2.25	.45		
	聴覚障害	24	2.13	.80		
	合計	60	2.00	.78		
奨学金などの財政支援	脳性まひ・肢体不自由	27	2.78	1.34	3.255*	c>a
	視覚障害	12	3.25	1.14		
	聴覚障害	24	3.63	1.01		
	合計	63	3.19	1.23		
成績管理	脳性まひ・肢体不自由	27	2.33	1.18	15.291***	b,c>a
	視覚障害	12	3.75	.87		
	聴覚障害	24	3.75	.85		
	合計	63	3.14	1.22		
授業に対する配慮	脳性まひ・肢体不自由	24	2.25	1.22	11.152***	c>a
	視覚障害	12	3.00	1.28		
	聴覚障害	24	3.75	.85		
	合計	60	3.00	1.28		
サービス満足	脳性まひ・肢体不自由	24	3.00	1.14	1.373	
	視覚障害	12	3.25	1.14		
	聴覚障害	24	3.50	.88		
	合計	60	3.25	1.05		
適応のための努力	脳性まひ・肢体不自由	24	1.88	.80	6.677**	c>a
	視覚障害	12	2.25	.87		
	聴覚障害	24	2.75	.85		
	合計	60	2.30	.91		

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 11 障害等級別に比較した学習及び生活における困難さ

質問内容	障害等級				t
	1-3 等級(n=41)		4-6 等級(n=22)		
	M	SD	M	SD	
講義内容	2.89	1.11	1.33	.50	4.112***
授業適応	3.11	1.21	2.33	1.32	1.765
図書館	3.00	1.20	1.00	.00	4.050***
トイレ	2.39	1.07	1.00	.00	3.151**
学内移動	2.39	1.12	1.00	.00	3.007**
事務手続	2.56	1.13	1.00	.00	3.355**
補償機器	2.88	1.03	1.00	.00	4.431***
情報交換	2.94	1.22	1.00	.00	4.727***
大学生生活	2.94	1.09	2.67	1.32	.687
対人関係	3.00	1.17	2.00	1.50	2.287*
施設・設備	3.17	1.18	3.00	1.73	.366
サポーター支援	3.83	1.16	1.67	1.00	5.141***
学科活動参加	2.89	1.00	2.33	2.00	1.305
情報提供	3.44	1.02	3.50	.55	-.130
年限内卒業	2.11	.74	1.00	.00	3.631**
奨学金などの財政支援	3.50	1.02	1.33	.50	6.198***
成績管理	3.28	1.16	2.33	1.32	2.224*
教授に対する配慮	3.06	1.23	2.50	1.64	1.012
サービスの満足度	3.33	.95	2.50	1.64	1.881
適応努力	2.39	.90	1.50	.55	2.363*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

において0.1%水準で有意差があり、図書館、対人関係、サポーター支援、学科活動参加、適応のための努力では1%水準で有意差がみられた。つまり、授業適応、事務手続、情報交換、大学生生活、施設・設備、成績管理の領域では、視覚障害と聴覚障害学生は脳性まひ・肢体不自由学生より多い困難さを示しており、学内移動では視覚障害学生が、授業に対する配慮は聴覚障害学生が困難さを最も多く意識する領域であった。これは事後検证でも同じ結果が得られた。

Table 11は障害等級別に学習及び生活での困難さについての差異を明らかにした結果である。障害等級によって学習及び生活において有意差があったが、特に講義内容、図書館、補償機器、情報交換、サポーター支援、奨学金などの財政支援の領域では、障害等級別で0.1%水準で有意差があり、トイレ、学内移動、事務手続、年限内卒業の領域では1%水準で有意差があった。言い換えれば、重度障害学生は軽度障害学生より学習及び生活において、より多くの困難さを抱え

ていることが明らかになった。

### 3. 障害学生の支援ニーズ及び改善すべき事項について

Table 12, 13は、障害学生の支援ニーズ及び改善事項を分析した結果である。まず、Table 12に見られるように、障害学生の支援ニーズ事項の中で、財政支援領域では、各種奨学金の要求が85.7%として最も高く現われ、授業・学習サポート領域の中では、学業に必要な情報交換及び授業上の難しさが38.1%であった。これ以外にも施設・設備領域の図書館施設及び学校内外生活支援領域の障害の理解・啓発、相談及び教育がそれぞれ28.6%で他の領域より多少ニーズが高いことが示された。

Table 13は、障害学生が提示した問題点及び改善事項を分析した結果である。休暇中のアルバイトの提供が46.9%で障害学生が改善を要求する最も高い領域であり、次にノートパソコンのノートテイク支援(25.0%)、インターネットによる授業資料の事前提供(18.8%)、

Table 12 障害学生の支援に関するニーズ領域

支援に関するニーズ領域		頻度( <i>n</i> =63)	%	順位
施設・設備	スロープ	6	9.5	11
	エレベーター	0	0.0	21
	点字案内表紙	6	9.5	11
	照明	12	19.0	8
	図書館施設	18	28.6	3
	その他	18	28.6	3
財政支援	無回答	3	4.8	18
	各種奨学金の支援	54	85.7	1
授業・学習支援	その他(アルバイトの提供)	9	14.3	10
	学習補償機器	6	9.5	11
	試験や成績管理書	6	9.5	11
	書類申し込み及び発給などの事務サービス	0	0.0	21
	学業に必要な情報交換及び授業上の難しさ	24	38.1	2
	教員との交流	12	19.0	8
	サークル活動	6	9.5	11
	その他	6	9.5	11
	無回答	3	4.8	18
	大学内外の生活支援	対人関係	6	9.5
障害の理解・啓発		18	28.6	3
相談及び教育		18	28.6	3
その他		18	28.6	3
無回答		3	4.8	18

Table 13 問題点及び改善事項

改善事項	頻度( <i>n</i> =63)	%	順位
休み中のアルバイトの提供	15	46.9	1
ノートパソコンによるノートテイク支援	8	25.0	2
インターネットでの授業資料の事前提供	6	18.8	3
授業終了後問合わせ時間を別に用意	3	9.4	4
合計	32	100.0	

授業終了後問合わせ時間を別に用意してもらいたい(9.4%)が続いた。

#### IV. 結果と考察

本研究は、障害学生の支援実態及びニーズを調べることで、障害学生の大学生活への適応の問題点を分析し、望ましい大学支援サービスの方向を示そうとした。この章では、本研究の結果を土台にして先行研究との関連性に対する論議をすることによって、本研究の妥当性を検証する。

第1に、障害学生の大学生活への適応のための支援事項を見ると、まず、学習活動の支援においては、全体的にノートテイクによる支援が最も多いことが明らかになった。なお、障害等級による学習活動支援においては障害等級別で差があり、すなわち、重度障害学生は軽度障害学生よりも、試験方法の修正、手話通訳、

学習補助機器の貸出、録音教材の提供などの学習活動で、より多い支援を受けていた。この結果は、ウォンジョンレ(2001)の研究結果と一致する。今後、重度障害に対する学習活動支援をさらに拡げなければならないことを示している。一方、障害カテゴリー別の学習活動の支援においても障害カテゴリー間格差があった。つまり、視覚障害学生たちはノートテイク支援と試験時間の延長などの領域で他の障害カテゴリーの学生たちより多くの支援を受けており、脳性まひ・肢体不自由学生たちは授業資料のファイルによる事前提供及び講義室の環境整備について、より多くの支援を受けていたが、このような結果は障害カテゴリー別の特性をよく表わしている。次に、大学生活の適応において支援事項を見ると、全体的に受講申請の事前配慮に対する支援が最も多い。この結果は、ウォンジョンレ(2001)の障害学生の教育的ニーズの中、履修手続きで受講申請改善の要求が最も高いという研究結果と一

致する。障害学生が受講申請などの履修手続きに、多くの困難さを持っていることを意味する。したがって、このような問題点を補うための受講申請優先権制度の導入が必要である。また、障害等級による支援では、障害等級間の差があったが、補装具の貸出、校内外の障害者用車両の運行などの領域は、重度障害学生が軽度障害学生より多少多い支援を受けていた。

第2に、障害学生の大学における学習及び生活に関する意識について障害カテゴリー別の有意差があった。すなわち、障害カテゴリーの中、聴覚障害が学習及び生活で最も強い困難をもち、次に視覚障害学生と脳性まひ・肢体不自由学生の順であった。また、障害等級による学習及び生活においても、講義内容、図書館、補償機器、情報交換、サポーターの支援、奨学金などの財政支援の領域で有意差が見られた。つまり、重度障害学生は軽度障害学生より、学習及び生活においてさらに多い困難を持っていることが明らかになった。したがって、大学では、障害学生の学習及び生活を助けるための支援制度を積極的に用意しなければならない、特に聴覚障害学生と重度障害学生のための制度の設立が切実であると考えられる。

第3には、障害学生の支援ニーズ及び改善事項において、財政支援領域の中で、奨学金支援に対する要求が最も高く、次に授業・学習支援領域における学業に必要な情報交換及び授業上の難しさであった。このような結果は、ユンゾムリョング(2003)の研究結果と一致し、聴覚障害学生は試験範囲や日程、課題内容などについて随時に文字表示サービスの提供を要求している。障害学生の授業・学習支援を助けるための文字表示サービス制度を体系的に提供する必要があるのではないだろうか。これ以外にも、聴覚障害と視覚障害学生は、案内表示電光板の設置、聴覚障害者用トイレの設置、点字案内標識と街燈の設置を要求した。このような結果は、ユンゾムリョングが明らかにした障害学生統合教育支援の問題点と一致する。脳性まひ・肢体不自由より聴覚障害学生と視覚障害学生のための施設・設備が相対的に不足していることを示唆する。したがって、大学内の聴覚障害と視覚障害学生のための施設・設備の充実として、照明施設、案内表示電光板の設置、聴覚障害者用トイレの設置、点字案内標識などを優先的に設置しなければならないと考えられる。

現在、韓国の大学では、障害学生のための支援サービスを講ずるための努力をしているが、まだ充分でない実情にある(キムチョンウ, 2000)。大学での障害学生に対する支援は、障害者の大学生生活と教育活動が

より自由でなだらかに行われるように提供される人的・物的支援体系として組織しなければならない。このことは、画一的に提供されるサービス体系を克服し、学生1人ひとりのニーズに沿って提供される一連の個別化された支援体系を確立することを意味する。本研究から明らかになった課題を改善することによって、障害学生が一般学生と同等な権利を持った市民として学業の遂行を可能にする支援体系を確立することになるであろう。高等教育機関の中心的存在である大学において、障害学生のための積極的な支援が行われなければならない。そのためには、大学内の障害学生支援制度を確立しなければならない。

## 文 献

- 강영심 외 (2005) 통합교육 - 교사를 위한 특수교육 입문. 한국통합교육학회, 학지사.
- 교육인적자원부 (1999a) 창조적 지식 기반 국가 건설을 위한 교육발전 5개년 계획 (시안).
- 교육인적자원부 (1999, 2003) 특수교육연차보고서.
- 교육인적자원부 (2005) 대학장애학생 교수 - 학습 지원편람 개발 연구. 교육인적자원부.
- 김동연, 김영환 (1998) 장애학생 고등교육 지원 방안. 국립특수교육원 1, 9-12.
- 김민경 (1999) 대학내 장애인 편의시설 개선 방향에 관한 연구. 건국대학교 대학원 석사학위논문.
- 김성애, 박찬웅, 이해균 (2003) 장애대학생 학업성취 실태 및 대학생활육구 분석. 특수교육학 연구, 37, 335-357.
- 김주영 (2005) 장애인 고등교육 지원 제도와 방법에 관한 연구. 단국대학교 대학원 석사학위논문.
- 김천우 (2000) 장애 대학생의 학교생활 실태와 지원 방안에 관한 연구. 단국대학교 특수교육대학원 석사학위논문.
- 김헬레나 (2000) 장애학생 고등교육 지원체계에 관한 연구. 연세대학교 대학원 석사학위논문.
- 양재신 (2000) 장애인 대학특례입학 장애대학생의 교육환경. 현장특수교육, 11, 40-44.
- 원종래 (2001) 장애대학생의 지원서비스 프로그램 개발을 위한 기초 연구. 특수교육연구, 8, 47-70.
- 윤점룡 (2003) 대학에서의 장애학생 통합교육 지원 실태와 문제점. 1, 3-44.
- 이정운 (1999) 장애학생과 대학의 교육환경. 현장 특수교육, 1999-겨울호.
- 정동영, 김주영 (1999) 특수교육운영위원회 활성화

- 방안 연구. 국립특수교육원.
- 정동영, 박승희, 원성욱, 류숙렬 (2005) 대학 장애 학생 교수 - 학습지원개발연구. 국립특수교육원.
- 정정진 (2003) 대학에서의 장애학생 교육지원 방안. 제1회 대학 내 장애학생 통합교육 환경개선 세미나. 한국재활복지대학, 109.
- 정정진 (2005) 고등교육기관 장애학생 지원 정책 방안. 제3회 통합교육 환경개선 세미나. 한국재활복지대학, 10-13.
- 정정진의 (2003) 장애 대학생 교육복지지원 평가 편람 및 기준 연구. 교육인적자원부, 정책연구, 2002-특-33.
- 한국재활복지대학 (2002) 장애인 대학입학 특별전형 제도 실행 이후 학내 지원체계 현황 및 개선방안 연구. 국가인권위원회.
- Bradley, V. J., Ashbaugh, J. W., & Blaney, B. C. ed (1994) *Creating individual support for people with developmental disabilities :A mandate for change levels*. Baltimore, MD: Brookes, P. H.
- O'Connor, U. & Robinson, A. (1999) Accession or exclusion? University and the disabled student: A case study of policy and practice. *Higher Education Quarterly*, 53, 88-103.
- O'Hara, S. (1993) Disabled student services at the University of California: Thirty years' experience and growth. *HESD: Abstracts*, B2-I-a.
- SPSS for Windows (Version 10.0) (2001) SPSS Inc., Chicago, IL.

(2008.1.24受理)